

弾／彼岸の家

越後妻有 大地の芸術祭

Bullet / Sacred House

Echigo-Tsumari Art Triennial 2006

原 すがね

HARA Sugane

I have participated in the 3rd Echigo-Tsumari Art Triennial in Summer 2006. Tsumari is the most heavy snowfall area in Japan and is also losing population so rapidly. Tsumari has been connected to the earth through agriculture for 1000 years, there are so many sacred landscape, home and people. But with exodus of young people and large earthquake, it has been difficult to maintain the town. What can art do for them? Everybody doubted about it and I was also searching the answer. But over 300,000 people have come to see the art works displayed in the rice field or closed schools and empty house. I believe that our hands can create the things much more wonderful than we could imagine, so I tried to make my art work with women in Tsumari.



はじめに

第三回となる越後妻有大地の芸術祭は、2006年7月23日から9月10日までの50日間、新潟県十日町市・津南町において開催された。回を重ねる毎に地域住民との関係が密着になり、今回は多くの作品が過疎化のため空家となったスペースを展示空間とした。私も作家の一人として、試行錯誤しながらも手探りで集落住民の方達と協働の上、作品制作をおこなった。

写真／上 空家プロジェクトのひとつとなった上足滝公民館。明治時代に小学校として使われていた建物を部分移築し、公民館として年に数回使われている。建物前にブランコがある。

写真／左 新潟県中魚沼郡 津南町の夏

◎ 写真はすべて筆者による

1. 展示計画

作品に向かう動機として命のことを考える。そして、手を動かすことの意味を探りながら制作している。

繊維素材を造形の言語と考え、作るという個人的な行為を越えた「力」を是非、越後妻有の女性達と共有したいという思いがあった。

1. 彼岸の家

夏、お盆の頃に地方へ出掛けると、戻ってくる精霊のために様々な用意がなされている。東京での生活に慣れ

た者にとって、八月は死者のためにあるのではないかと思えるほどである。

強い日射しのもと、田には青い稲穂の波が揺れ、死者と対話する。それは、命の意味があまりにも軽くなった今の私たちにこそ必要な時間かも知れない。

芸術祭のために都市から多くのひとが訪れる越後妻有の大地に、彼岸のための空間をつくり、命という存在の重さを感じる場にしたいと考えた。



弾／彼岸の家 足滝住民有志＋原 すがね 越後妻有大地の芸術祭作品 2006



作品の部分

2. 手仕事の力

今の時代に「手仕事」ということばは死語になりつつある。しかしひと昔前までは針仕事の手の良さが農村の嫁の評価にもつながるほどであった。そして自給自足に近い生活のなか、身の回りの縫い仕事を女性達は一手に引き受けていた。とくに山深い農村で雪の農閑期は手仕事に没頭する時間でもあった。時には囲炉裏端、時にはひと所に寄り合い、世間話に花を咲かせながらの作業であった。作業を進めるうちに辛い生活とは隔絶された自分の世界を繰り広げていたとも想像できる。

「百繋ぎ」と呼ばれる着物がある。「百徳きもの」ともいわれるが、生まれてくる子どもに百人分の徳が授けられるようにと、近所に住む長命の人や功名のあった人、元気な子供を授かった人から端切れをもらい、それを繋

ぎ合わせた着物である。端切れの一つ一つを慈しむように仕立てられた着物には恣意的ではない美しさが溢れている。このような祈りを込めた「針仕事」というのは世界中に存在する。それは強いメッセージを発することの出来なかった女性達が、ひと針ごとに思いを込めて縫ったものである。

「千人針」。愛する者が二度と帰らないかも知れないという時に、どうする術もない女性達がせめてもの思いを針の力に託した。今では性別に拘らず自分の声を発することは容易になってきているが、「彼岸の家」を手仕事の集積が生む大きな力の存在が体験できる空間としたい。越後妻有の女性達とそれが実現できれば、とても意義深いものと思った。

3. 作品設置空間として

1. 古い民家などの静かな場所
2. 地元女性にとって何か意味を持つ
3. 協力して下さる女性が集まりやすいなどの条件を満たす「彼岸の家」に相応しい場所という希望から津南町・上足滝の公民館を使用させていただく。

この古い木造の建物はかつて学校として使われ、現在、集落住民の集う場所として利用されている。

4. 赤く染めた古着を裂いて絢った縄を天井から吊るし、縄の先端には釘を結わいつけ、重りとして床に置く。夥しい数の弾丸、或は赤い雨が降るような光景とする。

4. 赤は生命の色

「陽」「火」「血」が象徴するように、生命の根源、生きるのに必要不可欠な色である。

そして赤には祓い清める儀礼の意味もあり、純粋な心や赤ちゃんを「赤心」「赤子」と呼ぶ。

一昔前まで藁を縄を絢^なうという行為は、農村ではごく当たり前の光景で、古い民家には土間に縄絢いの器具が設置されていた。太いものになると協同作業でなうこともある。撚られた縄は日常の用を足すものから、結界との境界線を意味したり、神事の祭りごとに使われたり、様々な意味をもつ。

5. 制作行程

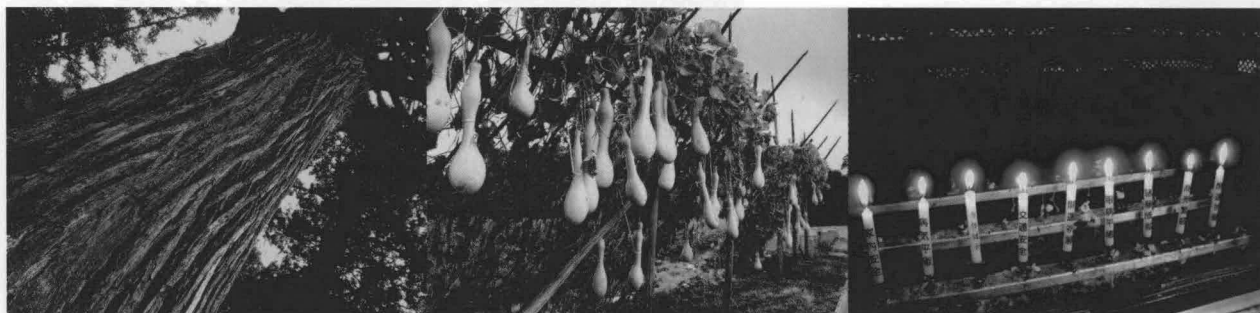
1. 地元の方たちと打ち合わせの上、古着を集める。
2. 集まった布を赤く染める。
3. 布を裂き、撚りをかけて縄を絢う。均一な太さではなく、先端の細い部分から段々太くなり、最後は房のようにする。
4. 床全体を絢り染めによる布で覆う。
5. 縄の先端に釘の束を結び付け、天井から吊るす。



ワークショップの様子



津南の夏の様子（左から）津南橋・庚申塚・見玉神社



田畑だけでなく、苔むす杉や瓜のように妻有には濃い緑が溢れる



JR 飯山線足滝駅・駅と信濃川に近い下足滝・かつて水力発電所の工事中には多くの人が居住し飲食店まであったという



中越大震災に続く記録的な豪雪のあと、5月に入っても残雪が見られ、建物の前にあったブランコは折れ曲がってしまった



集落住民への説明会・池田光宏氏の映像による説明・これまでの作品やサンプルを見せながら今回のプランを説明し、協力をお願いする

2. 人と大地と繋がること

1. 足滝に辿り着くまで

試みに「足滝」と入力し、検索してみた。意外なほどに沢山のサイトをヒットして驚いた。地図上には集落内に「十二神社」とあるだけだが、この多さは何だろうと思いつつ開いて納得した。全て鉄道マニアのサイトなのだ。信濃川（千曲川）に添って新潟県越後川口駅と長野県豊野を結ぶローカルなJR飯山線。しかも無人駅で冬は雪に埋もれてしまう。そこにはトンネルを抜けて無人駅に降り立った時の感動、駅舎が雪に隠れた様子の写真等、鉄道マニアの聖地にたどり着いたかのような思いが綴られていた。そして、それ以外の情報は何も見つけれなかった。

「足滝に使わせてもらえそうな空家がある。」芸術祭事務局のアートフロントギャラリーから連絡を受けて現地へ下見に行くことになり、まずは情報収集の為にインターネットで検索したのだが、鉄道マニアが好む駅ということと、集落には00戸しかない事以外は何もわからないまま、展覧会場となる上足滝公民館へ向かった。

足滝は駅と信濃川に近い下足滝に8世帯、そこから5分ほど坂を上る上足滝に9世帯がある。江戸時代、信濃川の大洪水の折、一部の住民が上に移り住んだことから二つの地域に分かれているようだ。「足滝」という地名は通称で、現在の住所としては新潟県中魚沼郡津南町大字上郷寺石となる。平成17年（2005）に、それまでの松代や松之山、中里、川西などを合わせて「十日町市」が発足した時も唯一、津南町だけは独自性を貫くべく合併に参加しなかった経緯がある。そのいきさつから察せる通り、物事を納得するにも一筋縄ではいかないかも知れないと聞いていた。

今回で第三回目となる大地の芸術祭。第一回が開催された時は新潟で現代美術の変わった展覧会があるというニュースしか知らなかった。二回目は、大野一雄と中川幸夫による幾千ともつかぬ花びらが空から舞い降りるパフォーマンスや、田んぼの中の田舎道、汗を流しながら多くの若者が点在する作品を廻り、不思議な充足感に溢れているという記事に興味を持ったが、実際の展示を訪れることはできなかった。その後芸術祭の記録集を見る機会があり、通常のギャラリーや美術館のホワイトキューブで接するアートの存在感とは全く異質の世界に

衝撃を受け、自分も参加してみたいという強い思いに駆られた。何故実際の作品を観ていないのに自分の発表の場としてイメージを膨らませることができたのか。日本一の豪雪地帯・米どころであること、典型的な過疎化が急速に進む地域、そんな場所が作品に与える独特な空気と、そこで住民との関わりを持ちながら、その場に相応しい作品を作る。ただ整った空間できれいな作品を発表するのではなく、人の心を揺さぶるようなものにするためには、妻有が放つ大きなエネルギーが必要だったのかも知れない。第三回に向けて初めて公募されたプロポーザル作品へのプランを練った。

そのような思いを募らせつつ、翌年の夏、10日間だけ妻有に恒久設置されている作品を巡るツアーが開催され、同行する事が出来た。想像以上に里山の空気は濃く重たかった。暑さで緑が蒸せ返るように感じた。作品はそれに拮抗するだけの強さを持っていない。正直言って自信がなくなった。日頃扱っている繊維素材はあまりにも曖昧な存在で、安直に大きな自然と歴史の重みに太刀打ちできるものではない。それに追い打ちをかけるような中越大震災。数カ月前に訪れた地が瓦礫の山となっている。豪雪をも乗り越える家が地震には耐えきれず、道路は寸断され、美しい棚田は崩れ落ちてしまった。そして私は自分自身の存在とアートというものの無力さを感じた。

当然これで大地の芸術祭も無いものになるであろうと思っていたが、総合ディレクターの北川フラム氏はそのような中途半端な人物ではなかった。早速ボランティアを募り毎週末現地に入り、東京では被災地のために様々な行動を起こし、妻有の力となるべく精力的に動いていた。そして記録的な豪雪の冬が明け、雪の影響による妻有の深刻な様子が伝わって来たが、第三回目を開催するという彼の意志は揺るぎなかった。そして震災の翌年、ようやく足滝を訪問するに至ったのだ。



お預かりした古着を赤く染める・量が多く染めるのは大変な作業だった・染めた古着を裂いて縄を綯う



作業の様子・集落にたった二人しかいない小学生も手伝ってくれた・出来上がった縄を前に記念撮影



床に敷くための布を絞り染めで染色・東北芸術工科大学の学生が絞る作業を手伝ってくれた



畳を上げて大掃除、いくらやってもなかなかきれいにならない・痛んだ木材にニス塗る



畳みに絞り染めの布を被せ、床に敷き詰める・公民館館長の寅末さんご夫妻が花を植えるため、土を堀り起こして下さる

2. 上足滝公民館／空家プロジェクト

地元の住民が年に数回使うだけの公民館は、明治時代に学校として使われていた建物を部分移築した二階建ての木造建築である。建物の前に錆びかけたプランコがあり、学校としての記憶を蘇らせる装置のように感じた。窓は古いガラス特有の屈折した光を優しく取り込んでいる。奥には二畳ずつに仕切られた部分があり、そこで蚕を飼っていたそうだ。かつては養蚕・機織りの盛んであったこの地ならではの間取りだ。蚕がカサカサと桑の葉を食べる音を聞きながら子供達は勉強したのであろう。染織に関わって来た私にとって、何か縁があるようで嬉しくなった。今回の芸術祭では「空家プロジェクト」として、過疎化のため主のいない家や閉鎖した学校を展示空間として再生する40の作品が計画され、上足滝公民館もそのひとつとなった。

しかしながら、さすがに古い建物だけあって痛みが激しく、物置き代わりに様々なものが詰め込んであり雑然としている。一体ここで本当に展覧会ができるのであろうか。しかも芸術祭の広いエリアの一番南のはずれ、長野との県境に近い場所である。どれだけの人が訪れてくれるのだろう。集落の区長さんは快くこの場所を貸して下さることになり、展示場所を得た喜びの半面、不安も大きくなった。

予定ではすぐにでも現地説明会を開催し、皆さんの同意と理解を求め作品制作の協力を要請したいところだが、あっという間に雪の季節となった。高齢者が多いため、現地を訪れるのは雪解けを待たなくてはならなかった。説明会は同じく足滝で作品発表をする霜島健二・池田光宏氏と共におこなう。お二人とも芸術祭参加は二度目となり、要領を得ていらっしゃるので大変心強かった。この集落は今回初めて芸術祭に参加するため住民の方達の反応も様々だったが、皆さん共通の思いとして、国道からさらに細い橋で信濃川を渡って入る小さな集落に、何の役にも立たない「芸術」を観に来る人なんているのだろうか、という疑念があった。しかし、実は作家側も同じ気持ちで、ただ「三人で頑張ります」としか答えようがなかった。そして、その言葉通り三人とも本当に頑張った。作品のジャンルも異なり縁もなかった三人だが、それぞれ短い日程の中で完成の目処が立たない上に問題が山積み、メールのやり取りの中で思わず愚痴をこぼすほど苦勞し、励まし合う仲となった。私が一番大変だった

たのは大学のある山形と新潟、そして住まいの東京との移動距離が長いことだった。

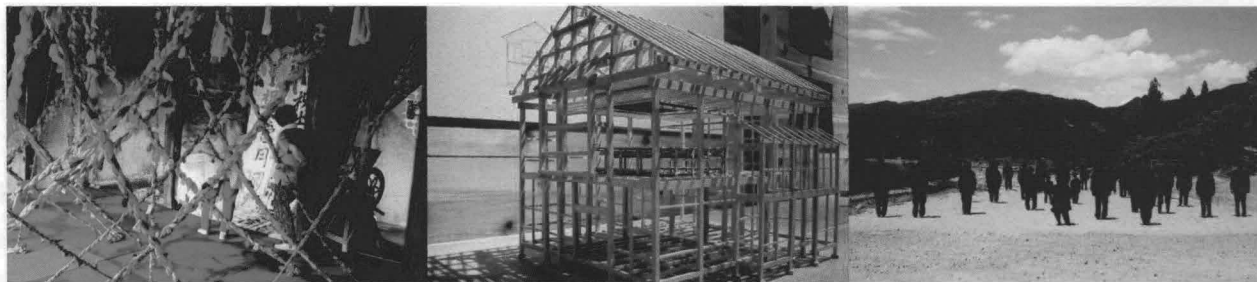
3. 足滝のお母さん達

制作の最初の行程は、まず地元の方達から古着を集めることだ。しかし、ただ持って来て頂くだけではもったいないので、コミュニケーションを図るためにワークショップをおこなう事にした。織り機を使わずに簡単に袋状のものが織れる方法で、裂織をしてみた。山のような古着を持って集まって下さった女性たちは皆さんお元気で、お喋りに花を咲かせながらも熱心に参加して下さいました。この集落には島田さん・小林さんという姓の方が多く、なかなかお名前が覚えられないので、自然に「お母さん」と呼ぶようになった。飛び交う言葉のかなりの部分が聞き覚えの無い単語で理解できないため、標準語に訳してもらわなければならなかったが、お母さん達が持ち寄って下さった自家製漬物と共に本当に楽しいひとときを過ごす事が出来た。

お預かりした古着を赤く染める。赤と一口で言ってもオレンジ系、ピンク系、ワイン系等様々なニュアンスの色。また、ベースとなる生地が異なるため、面白い表情の色に染め上がった。何分にも量が多いので洗ったり干したりの下作業がとても辛かったが、見かねた学生達が手伝ってくれたのには助かった。

赤く染め上がった古着をお持ちすると、布に新たな命が吹き込まれた事とても喜んで下さった。そしていざ制作となると皆さんの手際の良さに驚くばかりであった。手と足を使いながら実に要領よく縄を縛っていくのだ。手も足もよく動くが、それにも増して口が達者で、作業の間中お喋りや笑い声が絶えなかった。昔の失敗談や子供の頃の話、そして時には戦時中の辛かったことなども話題になった。集落の女性で最年長のフミさんは一番冗談の好きな方で、「先生達（作家）は暇なものでこんなことやとるんかと思ったが違うんか」などと言われてしまった。小学校時代の思い出として、戦時中、勉強はまったくせず、学校で縄を縛ったり、畑仕事をさせられた事も話して下さいました。

戦中の色々な話を伺っているうちに、集落に出征兵士を送る時に使った幕が残っていることがわかり、是非にと見せて頂いた。日の丸に「祝出征」と3人の名前が書かれている。幸いにもそこに名前がある3人の青年は無



集落の方の作品解説は大好評だった・プロスペクターによる空家プロジェクト展示から上足滝公民館の模型・足滝住民を型取った霜鳥健二作「足滝の人々」



ワークショップ校長を引き受けて下さった長老一二三さん・青田刈りした稲を杵で打ち柔らかくする・十二神社前の木陰には信濃川から涼しい風が届く



手取り足取りで草鞋作りを教えて下さる・作品めぐりをしていた若い人、ボランティアのこへび隊スタッフもワークショップに参加



夕刻からのレセプションの幕開けは千田郁代さんが作品からイメージを膨らませたパフォーマンス・衣装のボレロは作品と同じく古着を裂いて作った



集落の方の楽しいパフォーマンス・記録的な豪雪のため夏でも雪が残っている・宴もたけなわとなりこの地域に伝わる「烏踊り」が始まる

事戦地から帰還されたそうだ。これらは戦後、集落のお祭りで芝居を演じる時の幕として使われていた。集落住民の数も多く他に娯楽のなかった時代には、お祭りに自分達でお芝居を演じていたそうだ。今回の私の作品は争いを強く否定する意味を持っていたので、この幕と一緒に展示する事を提案し了解していただいた。しかしながら、残される家族にとって、戦地へ送り出す際に「祝」という気持ちになれというのは何と残酷な事であっただろうか。

最初に用意して下さった古着は一日の作業であつという間に縄となった。しかし予定の本数にはまだ足りず、再度家から布をかき集めて来ていただかなければならなかった。制作と同時に展示場所の大掃除もしなくてはならない。いくら掃いてもゴミが出る。畳を上げれば気が減入るほど沢山の虫の死骸がある。やらなければならぬ事の多さに押し潰されそうな気持ちになった。

4. 実りの時

何とか開会式に間に合うように作品が仕上がり、集落の方達は慣れ親しんだ公民館が深紅の空間に変貌したことで、皆一様に驚いた様子だった。制作に携わったお母さん達は満足げに観て下さる。展示会のガイドブックには作家名として私の名前しかないが、展示会場の入り口には大きく「足滝住民有志 + 原 すがね」と表示させていただいた。出征兵士の幕も含め、集落の人と歴史にスポットが当たることになり、来場者は大型バスで入り口に列ができるほど訪れ、これで責任が果たせたと安堵した。

展示に併せてワークショップとレセプションを企画した。ワークショップでは集落の長老、一二三さんに草鞋作りの講習を引き受けていただいた。一二三さんは大変温和な方で「みんな協力してやってくれや」と集落住民に声を掛け、元来草鞋をはじめ生活用品を作るのは農閑期の作業であるにも関わらず、わざわざ青田刈りをして藁を乾燥させ、材料を用意して下さった。ワークショップの会場は神社の前の木陰でおこなわれ、風がとても心地よかった。私も縄を縛うところから挑戦したが、足で押さえ手で撚りを掛けるだけの動作に頭が混乱してうまく出来ないのだ。手と足と頭を同時に使えない自分に気付き、人間として何と退化してしまったのかと唖然とするばかりであった。

「稲には無駄になる部分がない」、一二三さんに藁で作った日用品の数々を見せていただいた時、そう思った。これほどにも役に立つ素材であるのに、「藁にもすぎる」「藁をもつかむ」といった表現は、藁をととても卑下した表現ではないか。妻有の生活には無駄が無い。そして人々は確実に大地と繋がっている。冬には3メートルも雪が積もるが、それは仕方が無い事と大きな自然の力を受け止めている。自分が食べるものさえ作れない都市生活者、人間の持つ能力の末端だけを使い、表層の神経だけが鋭敏になってしまった我々は、彼等に支えられ、生かされているのだ。

日が暮れかかり、用意して下さったコシヒカリのおにぎりや取り立て野菜のバーベキューで盛大な宴会になった。この地域独特のあんぼやお母さん達の漬け物もある。驚いた事にビールを冷やしているのは残雪だ。公民館館長の寅末さんが山から運んで来てくれた。何と嬉しい演出だろう。宴もたけなわになると「烏踊り」が始まった。最初の現地説明会で展示会が成功するかどうか案じていた事が遠い昔のように感じられ、何とも言えない充足感に満ちあふれていた。日々の暮らしには必要なかった芸術の成り行きを暖かく見守って下さった足滝集落の皆さん、北川フラム氏をはじめ芸術祭を支えて下さった方達に心からの感謝の意を捧げたい。「私は私なりの方法で、足滝の人々、そしてこの大地と繋がる事ができた」、日が暮れてからもなお暖かさの残る地面を感じながらそう思った。

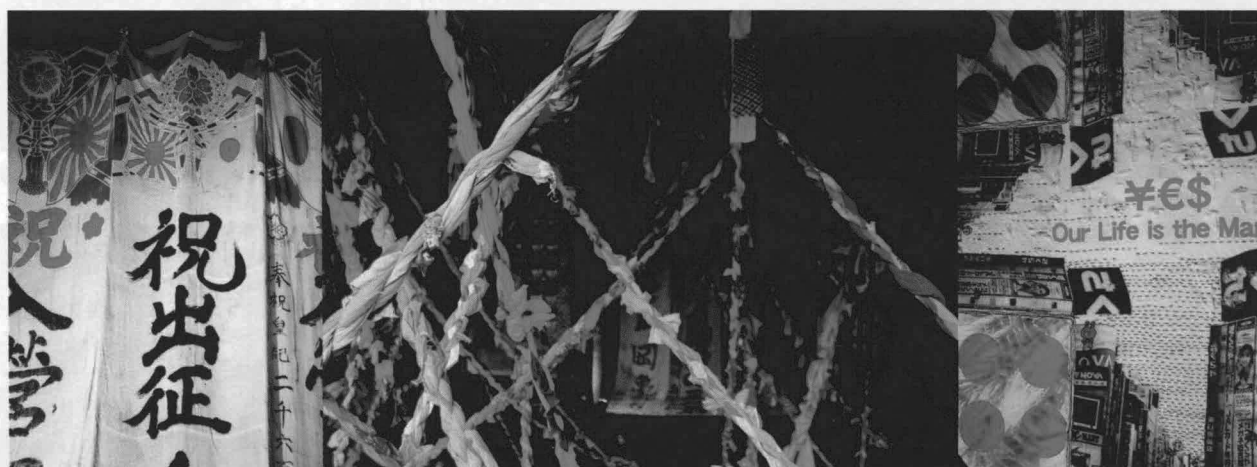
執筆者

原 すがね
HARA Sugane

芸術学部 美術科 助教授
School of Art/Department of Fine Arts/Associate Professor



奥には蚕を飼っていた空間があり出征兵士を送る幕と作品を展示した・味噌を造るために大豆を引く道具などは元からここにあったもの



出来る限り空間をいじることなく、しかも作品が設置された光景は以前と全く違うようになることを念頭にプランを練った



恒久展示も含め200以上の作品が点在、黄色い番号札を探しながら進む・空家プロジェクト作品には山本想太郎氏発案の赤い目印



会期半ばには、集落の方達のアート作品も出現（寅末さん作）、来場者を暖かく迎えてくれた。出勤前、見回りに出て下さった区長の源さん、朝もぎ野菜や漬け物をふるまい、作家よりも饒舌に作品解説をして下さったお母さん達に支えられて、50日の会期も無事終了した。そして冬が来れば一帯はまた雪に閉ざされてゆく。